

<2011年9月末刊行!!>

～歴教協 前委員長 石山久男氏すいせん～

# 最前線兵士が見た、中国戦線・沖縄戦の実相

—加害者にさせられた下級兵士—  
(近藤一さんの戦場体験証言に学ぶ)

著 **近藤一、宮城道良**

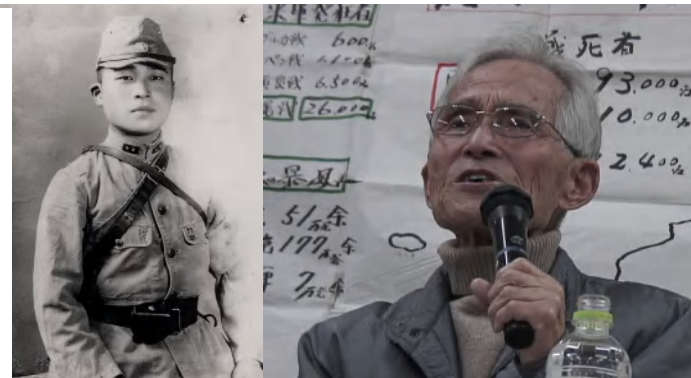
こんどう はじめ みやぎ みちよし

9月18日刊・1300円税込 A5判並製、カバー装、写真多数、104ページ予定

(発行：学習の友社) TEL03-5842-5641

〒113-0034 東京都文京区湯島 2-4-4 FAX03-5842-5645

gakusyu@po.jah.ne.jp



**宮城道良**：1964年東京生まれ、現在、名古屋市内の私立高校社会科教員。歴史教育者協議会会員。「不戦兵士・市民の会」東海支部事務局員。愛知マゼナ（愛知私教連社会科教科懇）事務局員。92年より毎年、近藤講演を中高校生に実施。昨今、戦場証言の教材化に取り組む。

証言者 **近藤一** 氏

(左写真：1942年、右写真：2010年)

生年月日：1920年3月31日  
出生地：三重県員弁郡阿下喜町  
入隊月日：1940年12月2日  
部隊名：独立混成第4旅団  
独立歩兵第13大隊第2中隊

★中国山西省、沖縄中部南部で戦う

1980年代に、仲間と「兵士達の沖縄戦を語り伝える会」を結成。1992年「不戦兵士の会」東海支部に、語り部として参加。戦場体験証言を市民・学生に語ってこられた。桑名市在住。

## - 加害と被害の重層性 -

「私は中国で十数名の中国人を、沖縄で十数名の米兵を殺傷しております」。92年より高校生の前ではっきり語られてきた加害証言。しかし、それは加害兵士にさせられていった被害者ではないだろうか…。そして、さいごには、最前線兵士は、軍に「虫けら以下に見捨てられた」。その悔しさは、共感したいものです。

一章 「近藤講演文」～戦場体験証言～

二章 戦場体験証言をどう授業にいかすか

三章 18年間の生徒感想文

四章 近藤証言の「加害証言」をどう学ぶか

五章 戦争証言を授業に使うことの重要性

さいごに 近藤証言のもつ、もう一つの意義

## この本おすすめします！近藤証言の意義：名古屋大学名誉教授 安川寿之輔氏

近藤証言の確かさは、第一に、同じ「加害兵士」が中国戦線でおかした「加害者の数々に口をつむぐわけにはいかない」として、侵略の「加害兵士」としての体験も克明に語っていること。第二に、日本軍一般の加害証言ではなく、**自分の所属部隊と自分自身の具体的な戦争犯罪についてのリアルな証言**であること。第三に、罪の意識なしに中国人を殺せる「東洋鬼」（トンヤンキー）に日本兵を仕立てるための初年兵教育として、中国人への刺殺訓練や軍隊内の差別構造を証言し、「相手が人間だという感情を持たなくなっていった」ことを語り、**差別意識が「戦争を起こす元」と証言**していることである。第四に、近年日本が戦争国家に向かおうとしているのは、戦後日本の社会が戦争責任に真剣に向き合ってこなかった結果と分析していることである。このような戦場体験証言は、稀有で貴重なものである。

今まで、**中高校生向けに**、近藤証言の読める書籍がなかったが、この本の前半がそれである。後半は、近藤証言を授業でどう教えるかが書かれている。**学生・教員・研究者・市民**の皆さんは、ぜひ購入していただきたい。